

高校生の学校生活における居場所づくりのための 学校司書による図書館運営

著者	武田 明典, 新居 池津子, 松田 ユリ子, 村瀬 公胤
雑誌名	神田外語大学紀要
号	33
ページ	253-271
発行年	2021-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1092/00001749/

高校生の学校生活における居場所づくりのための 学校司書による図書館運営

武田 明典¹
新居 池津子²
松田 ユリ子³
村瀬 公胤⁴

要 旨

本研究は、学校司書による学校図書館全体の運営における、特定の生徒への図書館での居場所づくりや受容・共感的カウンセリング機能に着目し、実践事例を収集するため行った、神奈川県公立高等学校4校の学校司書に対する半構造化インタビュー調査による課題探索的予備調査である。内容は、1) 勤務図書館の特徴；2) 校内における図書館利用の位置づけ；3) 校内外の連携；4) 生徒の利用状況；5) 具体的な図書館運営；6) 生徒の居場所づくり機能；7) 生徒へのカウンセリング機能；8) 図書館運営の課題点；9) その他、である。結果として、各学校の実情に即した図書館運営、様々なニーズを持つ生徒だけでなく全ての生徒に対する、利用しやすい雰囲気づくりの配慮と、そのためのゾーニングの工夫が重要であることが示され、今後の研究のための基礎的所見が得られた。

キーワード：学校司書、図書館、居場所、高校生、ゾーニング

¹ Akenori TAKEDA 神田外語大学
² Chizuko ARAI 東京大学大学院
³ Yuriko MATSUDA 神奈川県立新羽高等学校
⁴ Masatsugu MURASE 麻布教育研究所

1. 問題

本研究の調査対象者である学校司書の勤務形態については、一般的に、1) 正規・非正規雇用の職員、および、2) 年度ごと非常勤雇用の臨時的任用職員・嘱託職員がある。小・中学校では後者の雇用形態がほとんどである一方、高校では原則前者の立場での配置が進んでいる。また、非常勤職員の場合では、教員免許や司書の何れか（あるいは両方）、資格が求められる場合から、全く求められない場合に至る。1校当たりの勤務は、週に1～5日間、1名又は2名など、地方自治体による採用形式・勤務形態は多岐にわたる。

一方、生徒にとっては、発達段階にかかわらず、安心・安全な居場所があることは、学習に取り組んだり、学校生活を送ったりするために重要な意味を持つことが教育心理学の領域において指摘されてきている。たとえば、杉本・庄司（2006）は計859名の小学生・中学生・高校生を対象に学校や家庭が居場所としてどのような機能を持つのかについて質問紙調査を実施し、他者との関係から居場所の機能と発達的变化を検討している。その結果、高校生は「友人のいる居場所」が家庭では得られなくなった安心感を充足させる一方で、精神的なバランスを回復させる「自分ひとりの居場所」を求めたり、複数の居場所を組み合わせ持ったりすることを明らかにしている。

また杉本（2009）は、2校の中学生203名を対象とした質問紙調査を行い、教室・保健室・相談室の居場所の機能を比較検討している。結果として、3つの場所の間で居場所の心理的機能に有意差は認められなかった。しかし、多くの中学生にとって、教室は他者に受け入れられていると感じる居場所として機能しており、相談室も来室頻度の多い中学生にとって居場所として機能しているが利用者は少なく、保健室は利用者が多い一方で居場所の機能は低いことを明らかにしている。

ただし高校生は親からの独立を強く意識することから、男女ともに中学生よりも排他的で一定単位の仲間集団を形成する傾向にあることが指摘されている（榎

本, 1999)。また、杉本の研究には校内における居場所として学校図書館が含まれていない。その理由の1つとして、杉本が公立中学校を対象としていることがあげられる。杉本が質問紙調査を行ったのは1999年であり、「学校図書館」が学習指導要領の総則に初めて記載されたのが1989年、学校図書館標準の設定と学校図書館の図書整備5か年計画財源措置が始まったのが1993年、1953年に制定された学校図書館法改正による司書教諭必置の実施が2003年4月以降であったことを踏まえると、学校図書館の利活用が見直される過渡期にあたる。そのため、中学生の居場所として捉えられることは少なかったと考えられる。

近年では、学校図書館についても、「一時的に学級になじめない子供の居場所となりうることも踏まえ、児童生徒の登校時から下校時までの開館に努めることが望ましい。」と、「学校図書館ガイドライン」(文部科学省, 2016)に示された。これにより、学校図書館が居場所としての機能を持つことが教育現場に広く周知されると考えられる。ただし、学校図書館法には、学校図書館は全ての児童生徒に寄与すると謳われていることから、一部の限られた児童生徒のための施設・設備として、教育現場の教職員に誤った形で捉えられる可能性もある。

一方、令和2(2019)年7月に内閣府が発表した「子供・若者の意識に関する調査」(内閣府, 2019)では、高校生が含まれる15～19歳の年齢区分で、社会生活や日常生活を円滑に送ることができなかった理由として「友達との関係が悪かったから」(26.2%)、「成績が悪かったから」(20.0%)、「高校受験に失敗したから」(8.4%)、「中学受験に失敗したから」(5.8%)において、全体と比較し有意差が認められたと報告されている。つまり、中学生よりもむしろ高校生が学校生活に関わる悩みを抱えていることが窺える。

また、教育社会学領域における社会階層と高校進学との関連を検討した研究では、出身階層が学力に影響を及ぼし高校入学段階における学校間の違いとして現れるといったように、学校外の社会的格差が進学する高校のトラッキングとして反映されることが明らかにされている(多喜, 2011)。このことから、高校は進学

校や進路多様校等、学校により高校生が通学する高校の風土や性質も多様であるといえる（眞田, 2018）。

たとえば、進路多様校では、学習障害（LD）、注意欠陥多動性障害（ADHD）、自閉症スペクトラム障害（ASD）等の診断や認知がなされず、学習面・生活面で困難さを抱える生徒が多いという指摘がみられる（澤口・瀬戸, 2015）。一方で、進学校や中堅校であれば、そうした困難を抱える高校生は少なくなると推測されるが、進学や進路とも関係した成績に関する悩みを持つ高校生も潜在的に存在することは想像に難くない（高橋, 2014; 三関, 2018）。また、近年ではスマートフォン等の普及により、高校生を取り巻く環境は変わり、現実の仲間関係だけでなくネット上のいじめがみられる等にも影響を及ぼしていると考えられる（浅田・原, 2018）。したがって、どのような高校に通学しているのかといった社会的状況により悩みや困難の種類や程度は異なるものの、発達段階ともかわり、高校生は様々な悩みや困難を抱えていると考えられる。

そうした多様な悩みを抱える高校生に対して、学校図書館が居場所として機能していることがインタビュー（久野, 2011）や実践報告（松田, 2019）により明らかにされている。また学校図書館が、個別の事情や課題を打ち明けられ、学校と外部支援団体とを結びつける「2.5 プレイス」として機能していることや（鈴木ら, 2013）、学校図書館は書架により館内が緩やかに仕切られ、館内に親しい友人等と過ごす場所と生徒が個別に過ごすことができる場所を同時多発的に創出する物理的な特徴を持つことも明らかにされてきている（新居, 2020）。

こうした学校図書館を初めとする図書館やその居場所の機能については、久野（2020）が、アントネッラ・アンニョリ（2011）の「知の広場」という図書館像に基づき、近年では、日本においても多様な人びとの活動によって生み出される、開放性、動態性、包摂性がある場として理解されてきていると指摘しており、建築学の領域でも、ゾーニング（あるいは、ゾーニング手法）と呼ばれる研究において着目されている（北岡, 2008; 2009）。主に公共図書館を対象として、たとえ

ば子供連れの親と子供のために児童書エリアと一般書エリアを隣接させるといったように、館内利用の目的や館内で利用する場所が異なる利用者に対する配慮から館内環境や空間配置を検討するといった研究がみられる（北岡, 2011）。また、大学図書館では、学生の多様な学習スタイルに合わせ、一人で集中して作業できる静かなゾーンと議論ができる会話ゾーンの集約や区分を行うラーニング・コモンズにおけるゾーニングも着目されてきている（稲葉, 2017）。このような背景から、学校図書館も、高校生の学習と生活の両側面を支える場所として機能することが期待されているといえる。

ただし、高校生は学校の中に悩みを相談できる場所を求めている一方で、先の内閣府（2020）の調査によれば、学校での相談相手として教師は敬遠される傾向にあると報告されている。たとえば、古賀（2020）は同調査結果に基づき独自の分析を行い、専門家や専門機関の支援体制、あるいは、学校での友人との相談は重要である一方で、困難を抱える当事者にとっては相談や支援のパートナーとはなりきれず、「身近さ＋専門性」という相談・支援の重層性を確保することの難しさを同報告書の中で指摘している。したがって、高校生にとって、教師のみならず、専門家や専門機関や排他的な一定単位で形成される仲間集団の友人ものいずれも相談・支援者として捉えにくい状況を示しているといえる。このことから、高校生の居場所として機能する学校図書館を管理・運営するという意味で専門性を持ち合わせつつ、時には高校生自らが個別の事情や課題を打ち明けられるといったように身近な他者として、教師とは異なる立場から高校生を支援する常勤の学校司書が果たす役割は大きいといえる。

しかし、ここで近年の高校における学校司書をめぐる配置と雇用について立ち返ると、注視すべき状況がある。たとえば、文部科学省が2年に1度、全国の公立・国立・私立の小・中・高校を対象として行っている平成20（2008）年度～平成28（2016）年度の「学校図書館の現状に関する調査」によれば、以下のような傾向が認められる。高校は、小・中学校と比べて学校司書の配置水準は7割

前後と高く、常勤の雇用形態が半数以上を占めるものの、平成 26 (2014) 年度以降、公立高校では学校司書の配置水準と共に常勤雇用も減少し始めている。これらの結果は、司書教諭と異なり必置という拘束力はないものの、学校図書館法に配置の努力義務が明記されたにもかかわらず、学校司書の常勤配置が減少する傾向にあることを示している。仮に、このまま常勤の学校司書の配置が減少していくとすれば、これまで機能していた学校図書館が機能不全を起こすといった影響を及ぼす可能性もある。つまり、高校の学校図書館に学校司書が配置されるのか否か、また、常勤であるのか否かという違いは、単なる身分の違いというだけでなく、学校司書の職務や権限、ひいては、高校の種類やその高校が置かれている状況や教職員との関係ともかかわり、役割の遂行に影響を及ぼすと考えられる。

本研究は、学校司書による学校図書館運営について、従来の全生徒を対象とした教育支援の他に、本来の業務ではないものの、図書館には教室に居場所を見いだせないなどさまざまなニーズの生徒が来館するための居場所機能、および、受容・共感的な関わりのカウンセリング機能に着目する。

2. 目的

本研究は、各学校の学校司書による学校図書館全体の運営における、特定の生徒への図書館中での居場所づくりや受容・共感的なカウンセリング機能に着目した実践事例を収集するため、神奈川県内の 4 つの公立高等学校の学校司書に対して半構造化インタビュー調査を行った課題探索的予備調査である。

3. 方法

3. 1 調査対象者・時期・方法・倫理的配慮

本調査の対象は、神奈川県内の進学校から進路多様校に至る公立高等学校 4 校における専任職の学校司書 4 名に対して、事前に電話で調査概略を伝え、本人及び管理者からの許可が得られたのち調査を実施した。調査時期は、2019 年 9 月で

ある。方法は、調査者（第一筆者）が各学校に訪問し、図書館見学を行ったのちに、放課後などの時間を用いて、45分から1時間程度、学校司書に対してインタビュー調査を行った。

本研究における倫理的配慮については、もともと個々の生徒の事例には触れておらず、また、インタビュー対象の学校司書に対しても、資質や能力を問うものではない。学校司書に対しては、訪問調査の事前に研究の概要説明を行い、プライバシーの順守と調査に対する承諾を得られたうえでインタビュー調査を実施し、さらに、9項目の内容については、4高校ごとに項目順に記録をまとめた後に、4校の学校司書に対して書面にて、記述内容について本紀要に掲載して問題がないかどうかの確認を行った。なお、本稿における高校名は仮名のABC順で示す。

3. 2 インタビュー項目

本調査に先立ち、高等学校で学校司書として勤務する第三著者の松田に対して2019年8月に学校図書館の訪問見学と聞き取り調査を行い、以下のような9項目の半構造化インタビュー調査の内容を策定した。その後、9月に4校を訪問し調査を行った。

1) 勤務図書館の特徴（学校の特色との連動；図書館の運営方針など）；2) 校内における図書館利用の位置づけ（管理職の認識；教員の認識など）；3) 校内外の連携と、その成果；4) 生徒の利用状況（どのようなタイプの生徒か）；5) 具体的な図書館運営について（工夫点；配慮している点；留意点など）；6) 生徒の居場所づくり機能；7) 生徒へのカウンセリング機能；8) 図書館運営の課題点；9) その他、である。

4. 結 果

4. 1 A高校

- 1) **図書館の特徴**：普通科進路多様校の高校であり、多様な生徒が在籍する。低学力、外国へのつながり、さまざまな障害を抱える生徒もおり、一般的には読みやすいといわれているライトノベルもマンガも読まない生徒も多い。そのため、読書に限らない多様な利用ができるように、環境づくりをすすめている。
- 2) **校内の位置づけ**：図書館運営は、“良い意味で任されている”。さらに学校司書は、校務として3学年と活動支援グループに所属している。
- 3) **校内外の連携**：教職員と協働し、さまざまな教科で探究型の授業を図書館で行っている。また、校内の生徒指導グループ、キャリア支援グループや学習支援グループ、さらに、地域の若者支援を行う NPO 法人と連携し、生徒の困難を解決するしくみをつくっている。
- 4) **利用状況**：生徒、教職員それぞれにニーズの高い資料を揃え、授業も含めて活発に利用されている。その一方で、資料のみを目的に生徒が来館するわけではないので、より多くの生徒が図書館に足を運ぶ工夫について日々考えている結果、多様な方法で利用する生徒が増えており、学校図書館の生徒の認知度は高い。
- 5) **図書館運営**：学校図書館は全ての生徒が使う権利があることをモットーに、“いろいろな生徒が共存できるように”運営している。図書館運営は、学校司書にほぼ任されている状況であり、専門性をいかして判断がスピーディにできる良い面もある一方、弊害（例：教職員の無関心を引き起こす、一部の教員が図書館の活用を遠慮してしまうなど）もあるのではないかと。
- 6) **居場所づくり**：カウンター付近やソファコーナーなどは、会話する、雑誌を眺めるなどのインフォーマルな利用、奥は授業で30人がグループに分かれてテーブルを囲んで作業するなどフォーマルな利用がしやすいように、ゾーニングが考えられている。他にイベントなどの時には、テーブルや椅子を動かしてフレキシブルに使えるようになっている。ゾーニングの一環で、図書準備室を開放し

ており、学校司書やその他の大人と話したがる傾向の生徒が集まる。

7) **カウンセリング機能**：教師とは違う立場で話やすいためか、「他の誰にも言っていない」ことを相談されることがしばしばある。落ち着いて話を聴くようにする一方で、一人で抱え込まずに必要な教職員、管理職や外部若者支援者などと情報共有して生徒を支えることを大切にしている。

8) **課題点**：神奈川県内の学校司書の採用に関して、13年間もの中断の末にようやく5年前に正規職員採用が復活したものの、未だ採用数は少なく、また、新採用者が短いサイクルで県立図書館へ異動する傾向が強まったため、全ての県立高校で今後も長期的に安定した学校図書館運営を行うことができるかに不安がある。

9) **その他**：「学校全体を生徒の居場所にする」取り組みが行われてきた学校であり、生徒が「ランチルーム」や職員室前のテーブルスペースなど、居場所をさまざまに選択できることがとても素晴らしい。その選択肢の一つとして学校図書館があることで、「生徒が学校で唯一逃げ込めるアジールとしての学校図書館」という一部の生徒のための場所というネガティブなイメージから解放されたと感じている。

4. 2 B高校

1) **図書館の特徴**：技能系の専門高校によくみられる学力レベルであり、本を読まない生徒が多いと感じられたので、いわゆる小学校中学年レベル程度の書籍や絵本も含めて配置している。近年はまじめな生徒がほとんどであるが、生徒指導上の問題を抱える生徒もいる。約 14,000 冊の書籍のうち、日本十進分類法（NDC）5 類の専門書（工作・環境問題・建築・自動車・パソコン・料理など）が一番多い一方、漫画も約 2,000 冊をそろえている。

2) **校内の位置づけ**：管理職から図書館に対する締め付けなどはなく、また、教職員の図書館運営に対する理解度は高いとみている。生徒だけでなく、時折教員も図書館を利用したり、フラッと立ち寄りたりしている。図書館内は、飲食は可

としている。また、地域住民に対しても書籍の貸し出しを行っている。(但し、地域のリサイクル団体を通しての登録が必要)。

3) **校内外の連携**：教員も図書館を利用し、オブジェ（技術科教員の作成）やソファがありとてもリラックスできる雰囲気の良い図書館である。また、地域のリサイクル団体とのコラボレーションをはかった活動を行っている。

4) **利用状況**：特に、書籍を借りに来るわけではなく、ただフラッと立ち寄りに来たり、話しに来たりの生徒が多い（経験上、来館者のうち、実際に書籍を借りていく生徒は約1～2割程度）。

5) **図書館運営**：職員向け図書館便りの発行。また、生徒と学校司書とのやりとりで、興味深い発言やエピソードなどをプライバシーに配慮した形で、便りの裏面に1・2行程度で紹介をしている。生徒の関心を寄せそうな書籍の選書を心がけている。生徒の居心地がよくなるように、司書は生徒に過度には話しかけずに“見守る姿勢”でいる。ただ、一人だの話したそうにしていると感じられる生徒や何か探している生徒に対しては、学校司書から、“独り言のようにつぶやきながらスルリと会話に入っていく”ように工夫している。

6) **居場所づくり**：“おとなしい生徒が逃げ込む”というイメージを払拭させ、全ての生徒が気軽に立ち寄れる雰囲気づくりに努めている。どのような生徒でも受け入れる方針で運営している。高校ではあるが広い図書館ではなく、また、蔵書も多いとは言えない。落ちついて書籍を読みたい生徒と話し合いたい生徒とのゾーニングとして、書架の裏にかくれた席を設置し、前者のニーズに対応している。

7) **カウンセリング機能**：一人で来館する生徒の中には、家庭やクラスであまり相手にされておらずいわゆる“かまってちゃん”タイプの生徒もおり、その生徒を受け入れつつも、その生徒にばかりに学校司書がつききりになるわけにはいかず、全員平等に扱うようある程度の距離を置いて接している。

8) **課題点**：生徒の特徴やニーズに応じた図書館運営を行っているため、異動の

際には後任学校司書との引継ぎが大変なことが予想される。

9) **その他**：校内には、非常勤のスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーが勤務し、日常的に連携している。教員とは異なる第三者的な立場で生徒を受け止めることは大切であるが、勤務日数が限られており、日常的には彼らのことを受け止め切れていない。

4. 3 C高校

1) **図書館の特徴**：進学校のため生徒の学力は高く、また、生徒の気質は穏やかで、家庭環境も総じて落ち着いている。来館者は多くはない。図書分類などを示すサインのイメージカラーや表示方法を統一するなど、これから取り組んでいきたい。静かな図書館というよりは、いろいろな生徒が集まれるような図書館であった方が良く考えている。館内では、飲み物は可だが、食事は不可としている。

2) **校内の位置づけ**：前任校では、学校司書は特定の学年に所属していたため、学校の情報が入り生徒の様子がよく見えていたが、現任校ではそうではなく、生徒会のグループにのみ所属している。

3) **校内外の連携**：校外組織との連携事例はない。

4) **利用状況**：本好きの生徒が多く、新着の書籍紹介をすると、すぐ反応があった。図書館で勉強している生徒がおり、満席の時もある。また、生徒はイヤホンで音楽を聴きながら個人で勉強している様子である。

5) **図書館運営**：学校司書の役割として、生徒と生徒、生徒と教員とをつなぐ、また、資料とつなげるコーディネーターに努めている。いろいろな生徒が自由に図書館に出入りできるような運営を試みたい。また、生徒がなごめる雰囲気づくりのため、少し小声で話せるようなスペースを、今後設けていきたい。

6) **居場所づくり**：クラスに馴染めない生徒が一定数はいることが予想される。それらの生徒の中には、一人でいることが好きなようなそぶりをしているのでは

ないかと感じている。そのようなタイプの生徒は実際には図書館には来ていないのではないか、と学校司書は推察している。このように、高校にはいろいろなタイプの生徒がいると思われるので、図書館にもいろいろな生徒が来て欲しい。

7) **カウンセリング機能**：学校全体は総じて落ち着いている。掘り起こせば相談を希望する生徒がいるのかもしれないが、現状ではこれまでの経験に比べあまりニーズは感じられない。このような中、先日、生徒から家庭に関する相談を打ち明けられたように、学校司書は「教員とは違う立場なので話しやすいのではないか」ととらえている。学校司書の方からこれらのニーズの生徒に対してカウンセリング的な関わりを積極的に働きかければ、自己を開示してくれるかもしれない。

8) **課題点**：生徒数が増えており空き教室がない。自習室のような教室がないため、図書館利用の一部がその役割を果たしている様子である。

9) **その他**：校内では Wi-Fi 環境が整っている。また、近年は、正規の学校司書が減り、不安定な身分の臨時的任用や再任用の学校司書が増えており、以前のような学校司書の活動はインパクトが薄れてきていると感じている。

4. 4 D高校

1) **図書館の特徴**：落ちついた住宅街の中に位置する進路多様校の高校。1年後には別の高校との統合により、現校舎は閉校する予定であるため、本図書館は閉館に向けての図書整理や梱包・移動などの業務を行っている。2019年度は3学年の生徒のみが在籍しており、人数が少ないため利用は多くない。3学年の教室階に教室1個分のスペースを借りて、必要最小限の図書や雑誌を並べ、「図書分室」として運営している。

2) **校内の位置づけ**：図書館について管理職の理解は高い。特に若手教員は、学校司書に対して授業で使用する書籍を尋ねて来るなど、教員との意思疎通は高い。

3) **校内外の連携**：資料集めやワークシートの準備など、授業をアシストする。

4) **利用状況**：様々な生徒の利用があったが、年度ごとに生徒が統合先高校へ学

年ごと移動のため利用は縮小し、昨年は図書館と同階に教室がある2年生の利用が特に多かった。生徒は、ソファでくつろいだり、やんちゃな生徒が会話をしていたり、また、本好きの常連が単独で訪問するなど、さまざまなニーズの形態が見られた。その他に、テスト期間中の生徒同士の勉強会などの利用もある。

5) **図書館運営**：図書委員の活動は活発な学校ではないが、カウンター当番・図書整理などの作業や図書掲示のPOPを描いてもらうなどした。文化祭では古本市を実施した。来館する生徒には、「いらっしやい。」「いってらっしやい。」など、司書から声掛けをしている。昼休みなどの飲食は図書館分室では許可した。

6) **居場所づくり**：落ち着ける場所を提供することを基本としつつも、図書館のゾーニングに留意し、奥は静かに過ごしたい生徒、入り口付近のソファでは元気な生徒など、生徒たちが自然に使い分けており、学校司書もそれを許容している。

7) **カウンセリング機能**：図書の貸し借りを通じて顔なじみになった生徒は、教室が居づらいときに図書館に来て過ごすなど、素の自分を出せるようになる。日頃より利用している生徒から、授業中や休み時間など深刻な事例を含めた相談があることもある。気になる生徒のことは、担任に報告し連携を取っている。

8) **課題点**：そもそも本が好きなタイプの生徒の利用が主であるので、どのようにしたらより多くの生徒に利用してもらえるのか、また、運営面で改善点はないか常に留意している。図書の貸出件数だけの統計に着目するのではなく、利用頻度は多くはなくとも、授業で実際に活用できる図書や、生徒が図書館にあってよかったと感じられる図書の配置にも、留意したい。

9) **その他**：スマホを利用した調べもの学習や「情報」の授業でのネット利用指導などについては、課題が感じられるので、インターネットの活用方法や留意点について、授業で丁寧に教えるべきであり、図書館でもサポートしていけるとよい。

5. 考 察

5. 1 図書館の運営方針と校内の位置づけ

4校それぞれに、学校の文化、生徒の学力・気質などを考慮した、学校司書による独自の図書館運営方針が反映されていた。4校に共通していたのは、学校図書館は全ての生徒に開かれているべきであること、その対象には、少数の教室に居づらい生徒や注目喚起行動を示す生徒も当然含まれ、そのニーズも同時に受け入れるべきであることを前提とする運営方針であった。

校内の位置づけについては、進路多様校や専門高校では管理職や教職員との連携の度合いが進学校に比べて高い傾向が見られるものの、どの学校でも学校司書は専門職として存在を認められており、図書館の運営を信頼され、任されている。一方で、「一人に任せられたままの弊害」への言及もあり、教職員との連携における一人職種の難しさが推測される。

5. 2 図書館運営：ゾーニング（ゾーン分け）

A・B・D校の3名の学校司書が、5) 図書館運営、6) 居場所づくり、7) カウンセリング機能などの箇所では、“ゾーニング”や“ゾーン分け”という用語を使用していた。C校では用語は使われないものの、「生徒がなごめる雰囲気づくりのため、少し小声で話せるようなスペースを、今後設けていきたい。」などの発言から、同様の志向が考えられる。学校図書館では、静寂性を保ちながら読書や学習に集中できる環境を確保するとともに、様々なニーズの生徒も受け入れることが必要である。静寂な環境を好む生徒と、必ずしもそうではない生徒との双方のニーズを保証するためには、館内のレイアウトや環境に関して、学校司書は生徒の行動を観察し、また、他の教職員とも相談をして、効果的な生徒同士のパーソナルスペースを確保していくことが重要である。A高校ではカウンター付近のテーブルやソファコーナーと準備室のテーブル、B高校では出入り口付近および準備室のテーブル、D高校では準備室のテーブルが、会話しやすい場所として

利用されていた。生徒が自由に話せるような環境は、たとえば、相談室（カウンセリングルーム）の昼休みや放課後の開放、保健室の一角にソファを設置するなどの例からも、類似した効果が期待されるであろう。ただし、学校図書館の場合は、多様なニーズに同時に応える必要がある点で相談室や保健室とは異なる。公共図書館における開放性、動態性、包摂性を確保する場の概念（久野, 2020）に基づくゾーニングが、多様な生徒のニーズに応えようとする学校司書の学校図書館の運営戦略を支えるものとして有効である可能性が考えられる。今後、ゾーニングの理論と実践の両面からさらに検討される必要があるだろう。

5. 3 居場所機能とカウンセリング機能

居場所機能とカウンセリング機能に関しては、4校すべての学校司書が賛同をし、ゾーニングなどの工夫をして、多様な生徒に対して居場所やカウンセリング機能を取り入れたアプローチを行っている。しかしながら、この2つの機能については、スクールカウンセラーのように特化しては行うことはせず、また特化することも求められてはならず、“適度な距離を保ちながら”展開されている点が、学校図書館では特徴的である。そのために、学校司書は学校のスクールカウンセラーや養護教諭などの専門家や、その他の教職員、外部の若者支援者などの専門家に課題を抱える生徒をつなぐことで、間接的に生徒を支援しようとするのである。このことから、学校図書館の居場所およびカウンセリング機能は、カウンセラーなど専門家の目指す生徒の課題解決とは異なり、課題を抱える生徒を発見する機能と捉えることもできる。

5. 4 課題点・その他について

学校司書が、様々な学校のニーズにきめ細かく対応して図書館運営を行うためには、安定した雇用形態が継続的に保証されていることが大前提である。この点に関して、2校で、学校司書全般に関する雇用条件改善の必要性が指摘された。

生徒とじっくりと向き合い支援を行うためには、マンパワーの確保が欠かせない。これには、行政的な理解と対応が必要であろう。

5. 5 今後の課題

今回の調査は、同じ県の県立高校4校という少ない協力校の学校司書を対象としている点で限界がある。また、対象者が、学校図書館の居場所やカウンセリング機能に対して賛同的な立場に偏っていた可能性がある。相反する立場の意見も含む可能性のある同一県の県立高校全校調査や、勤務条件の相違など、学校図書館の置かれた状況の異なる学校種の調査を行い、より広く意見や実践例を把握する必要があろう。ただ、少ない事例ではあるものの、さまざまな教育的ニーズのある生徒を支援するためには、全員に開かれた学校図書館運営方針に基づく学校司書の積極的な活動と、他の専門職との連携が重要であることが今回の調査から示唆されている。今後は、調査対象を広げ、また、学校司書以外の教職員が学校司書によるさまざまなニーズの生徒への関わり実践をどのように認識しているのかなどの研究が必要であろう。

引用文献

- アンニョリ, アントネッラ (2011). 知の広場：図書館と自由. 萱野有美 訳, みすず書房.
- 新居池津子 (2020). 昼休み時間を過ごす中学生から捉える学校図書館の機能：書架によって創出される場所における居方に着目して. 日本図書館情報学会誌, **66**(1), 1–18.
- 浅田瞳・原清治 (2018). 高等学校におけるネットいじめの実態に関する実証的研究. 仏教大学総合研究所紀要, **25**, 15–31.
- 榎本淳子 (1999). 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達の变化. 教育心理学研究, **47**(2), 180–190.
- 稲葉直也 (2017). 図書館はなぜ利用者に好まれるのか：中央図書館新ゾーニングの検討に向けた利用者アンケート調査報告. 早稲田大学図書館紀要, **64**, 33–73.
- 北岡敏郎 (2008). ポピュラーライブラリーエリア創出の可能性：地域公共図書館における開架フロアのゾーニング手法に関する研究(1). 日本建築学会計画系論文集. **73** 巻, **626** 号, 751–756.
- 北岡敏郎 (2009). ポピュラーライブラリーエリアの形成と資料構成案：地域公共図書館における開架フロアのゾーニング手法に関する研究(2). 日本建築学会計画系論文集. **74** 巻, **638** 号, 751–760.
- 北岡敏郎 (2011). Active ゾーンを形成した図書館におけるファミリー利用の特徴：地域公共図書館における開架フロアのゾーニング手法に関する研究(4), 日本建築学会計画系論文集, **76**(667), 1545–1552.
- 古賀正義 (2020). 「困難経験」「問題体験」を有する若者の社会生活・生活支援, pp.137–149. 子供・若者の意識に関する調査 (令和元年度)
内閣府 <https://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/ishiki/r01/pdf/s3.pdf>

- 久野和子 (2011). 「第三の場」としての学校図書館. 図書館界, **63**(4), 269–313.
- 久野和子 (2020). 「第三の場」としての学校図書館. 多様な「学び」「文化」「つながり」の共創, pp.3–17. 松籟社.
- 松田ユリ子 (2019). 学校図書館でカフェを. 居場所カフェ立ち上げプロジェクト編著, 学校に居場所カフェをつくろう! 生きづらさを抱える高校生への寄り添い型支援, pp. 144–153. 明石書店.
- 三関直樹 (2018). 中堅受験校の高校生の進路形成過程における「悩み」の実証的研究. 日本高校教育学会年報, **25**, 62–71.
- 文部科学省 (2009). 平成 20 年度「学校図書館の現状に関する調査」の結果について. https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/dokusho/link/1368678.htm
- 文部科学省 (2011). 平成 22 年度「学校図書館の現状に関する調査」の結果について. https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/dokusho/link/1410430.htm
- 文部科学省 (2013). 平成 24 年度「学校図書館の現状に関する調査」の結果について. https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/dokusho/link/1330588.htm
- 文部科学省 (2015). 平成 26 年度「学校図書館の現状に関する調査」の結果について. https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/dokusho/link/1358454.htm
- 文部科学省 (2016). 平成 28 年度「学校図書館の現状に関する調査」の結果について. https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/dokusho/link/1378073.htm
- 文部科学省 (2016). 学校図書館ガイドライン.
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/dokusho/link/1380599.htm
- 内閣府 (2020). 子供・若者の意識に関する調査 (令和元年度).
<https://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/ishiki/r01/pdf-index.html>
- 眞田英毅 (2018). 高校進学における学校外教育の効果: 低階層の子どもたちの教育達成. 社会学年報, **47**, 69–82.

- 澤口真理・瀬戸美奈子 (2015). 高校生の文章読解における課題について：日本語能力の観点から. 三重大学教育学部研究紀要, 自然科学・人文科学・社会科学・教育科学, **66**, 165–170.
- 杉本希映・庄司一子 (2006). 「居場所」の心理的機能の構造とその発達的变化. 教育心理学研究, **54**(3), 289–299.
- 杉本希映 (2009). 学校環境における「居場所」機能の検討. 中学生の「居場所環境」における心理的機能に関する研究, pp.123–148. 風間書房.
- 鈴木晶子・松田ユリ子・石井正宏 (2013). 高校生の潜在的ニーズを顕在化させる学校図書館での交流相談：普通科課題集中校における実践的フィールドワーク. 生涯学習基盤経営研究, **38**, 1–17.
- 高橋伸行 (2014). 高等学校における「進学校」の風土と文化. 椙山女学園大学教育学部紀要, **7**, 45–53.
- 多喜弘文 (2011). 日本の高校トラックと社会階層の関連構造：PISA データを用いて. ソシオロジ, **55**(3), 37–52.

謝 辞

本研究調査実施に際し、神奈川県内高等学校 4 校の学校司書の協力を得たことに感謝の意を表します。